研　修

カリさんのコミュニケーション力

荻原 久義
おぎわら ひさよし
(財)砂防・地すべり技術センター
企画部調査役

写真-1 ロンボク島の警察学校前

ロンボク島の土砂災害

「2006年1月末、インドネシア・ロンボク島写真-1ベランティン川流域は、豪雨により地滑りや土石流が発生して甚大な被害を受けた。土砂は農地や橋を押し流し、住宅、そして町の公共施設、警察学校まで押し寄せた。」

これはインドネシア公共事業省水資源総局の西ヌサ・テンガラ州、治水海岸事務所計画・調査課のI Ketut KARIHARTA（イ・クトゥトゥ・カリハルタ、以下カリさん）のレポートの一部です。

2006年といえば、インドネシアではメラピ山の噴火、ジョクジャカルタの地震があったと思いつつ、OCHA（国連人道問題調整事務所）のRelief Web、そしてISDR/CRED（国連防災戦略/ベルギー・ルーベンカソリック大学の災害データーベース）で、ロンボク島土砂災害を探してみると、ようやく「ロンボク及びバリ島で合計死者11人、被災者3000人」の記録を見つけました。これもCREDの統計基準の一つが「死者10人以上の災害」としていたためであり、改めて世界の自然災害の多さを再認識させられました。

コミュニケーション力

JICA集団研修「火山学・総合土砂災害対策」コースの主要部分をなす2ヶ月半の個別研修で「何を学びたいか」を聴取するため、来日前の2月に初めてのテレビ会議写真-2を開催しました。ジャカルタのJICA事務所でのカリさんは、JICA東京のカリキュラム委員の質問に答えて「砂防計画を学びたい」と一言述べていました。隣

の火山学研修生ヘリさんと同様に緊張の面持ちでした写真-3。

そんな言葉少ないカリさんは、来日後常にロンボク島の地図と写真を携行していました。4月、国土交通省砂防部長への表敬訪問でもベランティン川流域の地図を広げ「2006年の土砂災害を繰り返したくない」と訥々と説明していました写真-4。

また、研修期間中2週間おきに開かれた「ふりかえりと討議」の時間においても、カメルーンからの研修生オジュクさんの熱弁を聞く役を努めていました。

そうして6月中旬から当センター砂防技術研究所における研修がスタートしました。

「私は、インドネシアから来ました。カリと言います。どうぞよろしくお願いします。」と挨拶、インドネシア語で声をかけられ、安心した様子でした。早速催された歓迎会では、インドネシアOBの役職員が集まりました。その夜は、温厚で静かなカリさんから、よく話し歌うカリさんに変身しました。英語もよくしゃべるようになったので尋ねると、「テレビ会議では、しゃべれないから静かにしていた」とお茶目な回答をして、来日後オジュクさんから毎日勉強してきたとのこと。日本語の学び方についても「帰ります。帰りました。」と会話のなかで実際に使う変化を学ぶのだと教えてくれました。

写真-2 研修目的を聴取するテレビ会議

写真-3 カリキュラム委員の質問に答えるカリさん（赤シャツ）たち

写真-4 災害状況を説明するカリさん

写真-5 インドネシアOB諸兄と共に

8月、カリさんは、「Countermeasures for Debris Flow and Driftwood in Belanting River」をとりまとめて、STCにおける研修成果報告会、そしてJICAでの最終報告会を無事終えました。40才のカリさんは、インドネシアの歌「美しきインドネシア」や「可愛いあの子（ノナマニス）」を熱唱するのが好きでした。インドネシアＯＢ諸兄との合唱は、今でも耳に残っています写真-5。

1989年から、これまでに来たインドネシアからの砂防研修生13名の多くは、公共事業省研究所（砂防実験所）、JICAプロジェクト（砂防技術センター）、技術局そしてガジャマダ大学からでしたが、カリさんは現場事務所からの2人目の研修生でした。今回とりまとめた砂防計画がロンボク島ベランティン川流域の減災対策に生かされることを期待しています。